



日本人高校生と英語母語話者の統制英作文に見るgo +Xコロケーション：対照中間言語分析の観点から

堀家，利沙

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 444:159-174

(Issue Date)

2021-03-15

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012580>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012580>



日本人高校生と英語母語話者の統制英作文に見る

go + X コロケーション

—対照中間言語分析の観点から—

堀家 利沙

神戸大学 (大学院生)

Abstract

This study examined “go + X” collocation patterns found in Japanese high school students’ argumentative essays to detect their problems in the usage of collocation. The ICNALE Written Essays was used to explore “go + X” collocation patterns commonly found in native English speakers’ writing. Then, their data were compared to the data from the Corpus of English Essays by High School Students in Okayama which was developed with the cooperation of 199 Japanese high school students. This article addresses the issue through the following comparison: (a) Frequency of the verb “go”, (b) Measures of collocation richness, (c) A part of speech frequently follows the verb “go”, (d) “Go + X” collocation patterns. The results revealed that Japanese EFL students’ knowledge about “go + X” collocation is considerably limited although the verb “go” is one of the familiar words for them. Furthermore, the investigation highlighting parts of speech indicates that Japanese EFL students underuse adverbs, adjectives, “and”, and to-infinitive as the collocates of the verb “go”.

キーワード

基本動詞 go, コロケーション教育, 日本人英語学習者, コーパス言語学

1. はじめに

平成 30 年に告示された高等学校学習指導要領の改訂の要点の 1 つとして指導語数の拡大が挙げられる。現行の学習指導要領では、高等学校卒業までに指導する語数は 3000 語であ

るのに対し、新学習指導要領では 4000 語から 5000 語に引き上げられた (啓林館, 2018)。しかし、ここで示されている語数は単語の数を指し、それぞれの語について、コロケーション知識をどの程度、身につけるべきかについては、明記されていない。単語の知識も英語力を養う上で基盤となる重要な知識ではあるが、話し言葉、書き言葉の両方において約 70% 以上がコロケーションから構成されていることから (Hill, 2000)、基本語を様々な語と組み合わせさせて使えるコロケーションパタンの知識が英語学習上の鍵となると言える。そこで、本稿ではトピック統制された英作文データを使用し、日本人高校生と英語母語話者を比較することで、日本人高校生が抱えるコロケーション知識の問題点を解明する。

数あるコロケーションの中で、本研究では動詞 go の直後要素に焦点を当てる。基本動詞 go は C.K.Ogden が提唱する Basic English で挙げられている 16 種の基本動詞のうちの 1 つであり、これらの基本動詞が前置詞や不変化詞と結びつくことで 3,000 から 4,000 語の普通動詞の役割を代替できると言われている (室, 1985)。また、佐藤 (2013) は中学校の英語教科書をコーパス化し、基本動詞 go は教科書においても高頻度であることを明らかにした。基本動詞 go は中学校において初期段階で学習する語の 1 つではあるが、go + X コロケーション知識の発達については十分とは言えず、以下のような課題が見えてくる。

図 1

中学生の go 使用の実例 (JEFL)

I do n't eat break fast then I go	to school my mother say " get breakfast ! "
I spend a lot of [JP:karorii] go	to schoo .
I go	to [place] school .
So , I feel tired when I go	back to home .
At _last I go	to librerly .
I go	to Sigakougen [JP:sukii_jou] .
I will go	skiing with my friends .
So I go	look to stor with my mother .
I go	skiing with my family every year .
I will go	" SIBUYA " with my friend .
[JP:sishite] , [JP:sono_okane_de] , I go	to [JP:takashimaya] with friends .
I go	to the [JP:shoppingu] with my mother .
So my family ca n't go	ski .

図 2

英語母語話者の go 使用の実例 (COCA)

games end up being over, I would then have to go through the process of moving the
t East Nomo West and Isdc in the middle you chose to go round them that is weak IM
now come to an end totally now. # I could pbly go on and on but that's the gist of it. I
s website just looking around and though I should give it a go! Re: Please help me, Dc
now come to an end totally now. # I could pbly go on and on but that's the gist of it. I
s website just looking around and though I should give it a go! Re: Please help me, Dc
:em? If this is important, how far back should we go? # Oh, I think you should include
Tube and from what I saw you should be able to go to the Home Screen and choose !
= and it should list some networks and then you choose on and go on from there. I ca
Home button and see all those icons on the screen and go into Settings and see if W
dge there is a problem with the servers. I mean when you go to a movie and its set to

上図は、The Japanese EFL Learner Corpus（以下 JEFLL）とアメリカ現代英語を収集した Corpus of Contemporary American English（以下 COCA）を使用し、go の使用例を俯瞰したものだが、中高生は go to のみを過剰使用しているのに対し、英語母語話者の go+X コロケーションには多様性が見受けられる。この比較からもわかるように、外国語として英語を習得しようとする学習者にとってコロケーション学習は高い壁となる場合が多い。Nagano & Kitao（2008）は、日本人大学生、大学院生を対象に、コロケーションの文法性判別タスクを実施し、コロケーション習得は、英語習熟度に関わらず、全ての日本人 EFL 学習者にとって困難な項目であることを示唆している。そこで、本研究では、高校生の英作文における go+X コロケーションの使用の実態から、そのパターンをモデル化することで、日本人高校生のコロケーション産出能力における課題の解明を目指す。

2. 先行研究

本研究の目的に関連した先行研究は、多岐に渡る。そこで、本稿では基本動詞 go について（1）句動詞研究、（2）移動動詞 go、（3）コロケーション運用能力の発達、に関する研究に限って概要を紹介したい。

2.1 句動詞

英語母語話者の句動詞使用について、谷・堀池・杉森・富田（2002）は 1980～90 年代のハリウッド映画の字幕シナリオに見られる句動詞を調査し、出現頻度上位 20 位中 16 件が get, go, come のいずれかで構成される句動詞であることを明らかにした。EFL 学習者の句動詞使用に焦点を当てた先行研究も多く、Ryoo（2013）は韓国人 257 名の英語エッセイコーパスを作成し、イギリス英語を収集した British National Corpus（以下 BNC）と比較することで、高頻度で句動詞の構造をとる語彙動詞と不変化詞を調査した。その結果、両コーパスにおいて最も高頻度で句動詞の形をとる語彙動詞は基本動詞 go であることが明らかにされた。また、日本人英語学習者の話し言葉における句動詞使用傾向に着目した石井（2018）は、学習者向けに開発された 5 種の英英句動詞辞典中、いずれか 1 点以上に収録

されている句動詞 6,940 を分析対象とし、日本人学習者の話し言葉における句動詞使用を網羅的に調査した。調査結果より、基本動詞 go の句動詞使用に関して、日本人学習者は go to を過剰使用する一方で、英語母語話者が高頻度で使用する go in, go on, go into のような句動詞の使用については使用回避傾向が見られることが示唆されている。

2.2 移動動詞 go

移動動詞 come と go について英語母語話者と日本人 EFL 学習者の使用実態を比較した研究も多くなされてきた。高野（2011）は、認知言語学の視点から英語の come と go、日本語の「行く」と「来る」の事態把握には差異と普遍性があると指摘している。どちらの移動動詞を使うべきか選択する上で、英語の場合は聞き手の視点が選択を左右するが、日本語の場合は話し手の視点が重要となる。一方で、日英の移動動詞の捉え方には普遍性もあり、英語の移動動詞が形容詞と結びついて使用される場合（例：go wrong, come true など）と日本語の移動動詞が補助動詞的に使われる場合（例：晴れてくる、錆びていく）に焦点を当てると、話し手の視点がどちらの移動動詞を選択するかを左右するという点で同じスキーマをたどって理解されると主張している。投野・金子・杉浦・和泉（2013）は日英の移動動詞の事態把握における差異に着目し、日本人大学生と英語母語話者の英語論述型エッセイコーパスを調査対象として移動動詞 go と come の使用実態を明らかにした。コーパス内で移動動詞 go と come が物理的移動を表す場合とそうでない場合の比率を上級学習者、初級学習者、英語母語話者の 3 グループで比較したところ、come については 3 グループ間で大差は見られなかった。しかし、go については英語母語話者がわずか 35.6%しか移動を表す go を使用していないのに対して、初級学習者は 73.6%、上級学習者であっても 73.1%と依然として比率が高く、英語習熟度が上がっても日本人大学生は移動以外を表す go を上手く使用できていないことが明らかにされている。

2.3 コロケーション運用能力の発達

長谷川・中條（2003）は日本人英語学習者のコロケーション運用能力の発達に焦点を当てた研究を行い、学習段階が上がるにつれて、連語非使用者は減少し、連語の種類数は増加すると指摘した一方で、日本人英語として特徴的な連語（例：want to, for example など）が存在するという課題点を指摘した。また、石井（2005）では、句動詞やイディオムを項目ごとに訳語を暗記することで習得しようとする学習傾向が、コロケーション知識の発達を阻害する一因となっていることが示唆されている。この学習傾向は、中川（2012）が指摘する動詞と不変化詞がそれぞれ持つ意味から句動詞全体の意味を予想できないという多くの学習者が抱える課題とも関連していると考えられる。

2.4 小括

以上のように、先行研究は基本動詞 **go** のコロケーションの振る舞いについて、多くの知見を明らかにしたが、以下のような課題は残されている。(1) 日本人高校生と英語母語話者間で動詞 **go** の使用頻度自体に差が見られるかは明らかにされていない、(2) 高校生の動詞 **go** のコロケーション知識がどの程度発達しているのか明らかにされていない、(3) 高校生と英語母語話者間で、**go** 直後要素の品詞選択傾向に差が見られるか明らかにされていない。本研究では、以上の課題の解決を目指すこととし、次節にて研究設問を設定した。

3. リサーチデザイン

3.1 研究設問

日本人高校生と英語母語話者の統制英作文を比較し、**go** の使用および **go** の直後要素の選択について両グループでどのような特徴が見られるか解明するために、本研究では以下の 4 つの研究設問を設定した。

RQ1 : 日本人 EFL 学習者 (以下 JPN) と英語母語話者 (以下 ENS) の間で **go** の使用頻度の差はあるか。

RQ2 : JPN と ENS の間で **go** の共起語の多様性に差はあるか？

RQ3 : JPN と ENS を特徴づける **go** の直後要素の品詞は何か？

RQ4 : JPN と ENS を特徴付ける **go** の直後要素は何か？

以上の研究設問について考察する前に、本研究で焦点を当てる基本動詞 **go** が持つ意味合いと、本稿におけるコロケーションの定義について確認したい。

3.2 基本動詞 **go** の意義

基本動詞 **go** には中心義と副意義がある。中心義は「話し手がいる場所または話し手の視点がある場所から出ていく」であるのに対し、副意義としては「<人・物 (の声・音) などが (話し手の場とは無関係に) >向こうへ行く」という意味合いを持つ (瀬戸, 2007)。例えば, **I go to school.** 「私は学校に行く」を例にすると、話し手である「私」は今いる場所から出て、目的地である学校へと向かう訳だから、ここでの **go** は中心義としての使用であると言える。一方で, **The light went out.** 「明かりが消えた」を例に考えると「明かり」は話し手の場とは無関係に消えるわけだから、ここでの **go** は副意義としての使用だと考えられる。

3.3 コロケーションの定義

コロケーションの定義については先行研究でも様々な議論がなされてきたが、本研究では堀 (2009) の「コロケーションとは、語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する

る習慣的な共起関係を言う」という定義をもとに議論を進めたい。句動詞 (go out, go on など) は文法的コロケーションであり, “go bankrupt” などは意味的コロケーションに分類されるが, 本研究では go + X 型のコロケーション全てを総合的に観察し, 多様性, 品詞レベル, 語レベルの 3 観点から分析を行う。

3.4 分析対象のデータ

本研究では 2 種のコーパスデータの分析を行った。それぞれのコーパスについては 3.4.1 と 3.4.2 で詳しく述べる。

3.4.1 The ICNALE Written Essays

神戸大学の石川慎一郎氏が主導し, 2007 年から 2013 年にかけて開発されたこのコーパスは「大学生のアルバイトの是非」と「レストランの完全禁煙の是非」という 2 種のトピックについて 20 分から 40 分という制限時間を設けて書かせた 200 語から 300 語の英作文のデータを収集している。研究協力者は EFL 学習者, ESL 学習者, 英語母語話者と多岐に渡り, 総協力者数は 2,800 名に上る。本研究では, その中の英語母語話者 200 名のデータを使用し, 分析を行う。英語母語話者のデータは, 学生, 教師, 一般に 3 分類されており, 全てを ENS グループとしてまとめると, 総語数は 90,613 語となる。

3.4.2 岡山高校生英作文コーパス

このコーパスは, 筆者が 2019 年に岡山県の高등학교普通科, 高校 3 年生 199 名の調査協力を得て, 構築した。英作文のトピックは, ICNALE と統制し, 語数制限は 50 語から 100 語に設定されている。生徒の英語習熟度の目安としては CEFR の A1 が約 60%, A2 が 30% 強, B1 が 5% 弱であり, 提出された英作文について語数制限の ±10% 以上を超える英作文は分析対象外とした。本調査は, 最初に研究の目的と意義を説明し, 研究協力の理解を得てから行われた。英作文は授業時間内に, ICNALE と同じ 20 分から 40 分の制限時間を設けて行い, 生徒には予め, 英作文は回収後に評価し, 期末考査の得点と合算することで, 成績に反映することが伝えられた。得られた英作文データは全てテキストファイル化し, 総語数 27,590 からなる岡山高校生英作文コーパスとして, 本研究で使用されている。

以上の 2 種のコーパス基本情報については, 下表を参照されたい。

表 1

本研究で使用するコーパスの基本情報

	ICNALE Written Essays (ENS)	岡山高校生英作文コーパス (JPN)
協力者	英語母語話者 (計 200 名)	岡山県の高等学校普通科, 高 3 5 クラス (計 199 名) 英語習熟度: CEFR(A1:60%, A2: 30%強, B1:5%弱) 程度
総語数	90,613 語	27,590 語
英作文 トピック	意見主張型英作文 2 種 A: 大学生のアルバイトの是非 B: レストランにおける全面禁煙の是非	意見主張型英作文 2 種 A: 大学生のアルバイトの是非 B: レストランにおける全面禁煙の是非
時間	20 分～40 分	20 分～40 分
語数	200 語～300 語	50 語～100 語
その他	辞書使用は不可	辞書使用は不可

3.5 手法

RQ1 ではコンコーダンス AntConc (バージョン 3.5.8) を利用し, 前述の ICNALE 母語話者データと岡山高校生英作文コーパスを分析し, go の頻度を取得した。その際, go の活用形 (go, goes, going, went, gone) は全て頻度に含むものとした。総語数の異なる 2 つのコーパスについて粗頻度比較を行うことはできないため, 本研究では各コーパスから得られた粗頻度をコーパスの総語数で割り, 1,000 倍することによって, 1,000 語当たりの調整頻度を求めた。また, 調整頻度の比較のみでは, その差が統計的に有意か否かの確認ができないため, 粗頻度に対してカイ二乗検定を行い, 頻度の差が有意かどうかを検証した。

RQ2 では, 基本動詞 go の直後共起語を抽出し, 異なるサイズのコーパス間で多様性比較を行った。語の多様性比較の尺度としては, 一般に語の種類数を総語数で割る Type-Token Ratio (以下 TPR) が広く使用されているが, TTR はコーパスサイズが大きくなれば, 自動的に低下するため, サイズが異なる 2 コーパス間で TTR 値を比較することは不適切であるとされている (石川, 2012)。そこで, 本研究では TTR の調整指標の中で, Herdan の C 値を使用する。これは, 語の種類数の自然対数を総語数の自然対数で割ることによって得られる値である。それぞれの値を自然対数で割ることによって, コーパスサイズの差の影響を極小化している。(石川, 2012)。

RQ3 では, 予め早稲田大学の Laurence Anthony 氏が開発した品詞タグ付けソフトウェア TagAnt を使用した上で, 書き手を第 1 アイテム, go の直後品詞を第 2 アイテムとする対応分析を実行し, 各群を特徴付ける直後要素の品詞傾向を検討した。TagAnt を用いた品詞タグ付け結果の一例については, 以下を参照されたい。

I_PP think_VVP that_IN/that it_PP is_VBZ important_JJ for_IN college_NN
students_NNS to_TO have_VH a_DT part-time_JJ job_NN._SENT

First_RB, they_PP need_VVP many_JJ money_NN for_IN studying_VVG
college_NN ._SENT (岡山高校生英作文コーパスより)

RQ4 では、対応分析を手法として用いる。対応分析とは、頻度表の行と列の関係を組み替えることで、頻度表が持つ情報を少数の成分にまとめる解析法であり、言語データの分類に適している(石川・前田・山崎, 2010)ことから、この手法を採用することにした。第1アイテムを直後要素、第2アイテムを書き手とする頻度表を作成し、対応分析を実行し、各群を特徴づける共起語を調査した。書き手は8種(JPN: 高3の1~5クラス, ENS: 大学生・教師・一般)から構成される。

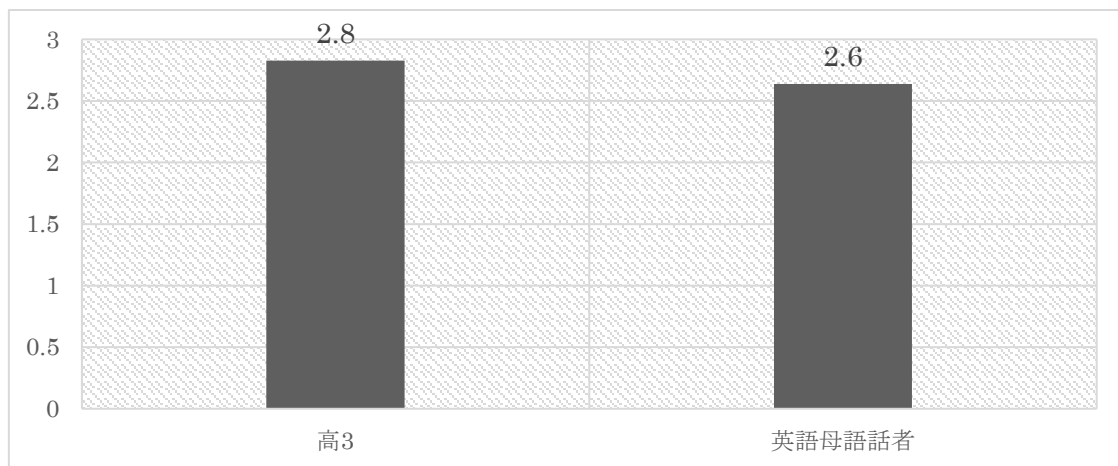
4. 結果と考察

4.1 総頻度の差 (RQ1)

両コーパスにおける go の総語数を 1,000 語当たりの頻度になるように調整し、比較したところ JPN は 2.8 語であるのに対し、ENS は 2.6 語という結果になった。

図 3

JPN と ENS 間の go 総頻度比較



中高生の英作文を収集した JEFLL や中学校英語教科書において基本動詞 go は高頻度語彙動詞の1つであるため、JPN の過剰使用が予想されたが、カイ二乗検定の結果、トピック統制英作文において JPN の go の使用量は ENS とほぼ同等で問題は認められなかった ($X^2=0.01$; $p=0.94$)。だが、JPN が後続要素とのコロケーションにおいても ENS 同様の使用ができているかについては明らかでないため、RQ2 以降では go の直後要素について多様性、品詞レベル、語レベルの分析を行うこととする。

4.2 共起語の多様性の差 (RQ2)

共起語の多様性について見るために、まず 2 種のコーパスについて go 直後要素を全てリスト化した結果、JPN では計 14 種（正用は 7 種のみ）、ENS は計 50 種という結果となった。表 2 では、JPN における誤用も含む全ての直後要素と、ENS において頻度 3 以上の直後要素をリスト化したため、参照されたい。今回、Herdan の C 値を計算する上で、JPN に見られる誤用及び不自然なコロケーションは抜いて、計算を行った。その結果、JPN は種類数が 7、総語数が 65 で C 値は 0.47 であるのに対し、ENS は種類数が 50、総語数が 246 で C 値が 0.71 という結果となった。学習者と英語母語話者の比較であるため、英語母語話者の方が高い数値となるのは当然ではあるが、同じトピックを与えられたにも関わらず、JPN の go コロケーションの多様性は ENS の 1/3 にとどまることから、JPN のコロケーション知識はかなり制約的であり、基本動詞 go 自体は使えていても、go のコロケーションは上手く使えていないと考えられる。

表 2

go 直後要素の頻度順リスト

JPN (正用 : 7 種, 誤用 : 7 種)			ENS (計 50 種)		
単語	粗頻度	調整頻度	単語	粗頻度	調整頻度
to	38	137	to	118	130
out	19	68	out	23	25
down	3	10	on	10	11
on	2	7	outside	10	11
shopping	1	4	ahead	9	10
outside	1	4	through	6	7
into	1	4	there	5	6
以下、誤用 (C 値の計算からは除外)			without	3	3
*society	3	10	with	3	3
*trip	2	7	so	3	3
*a	2	7	off	3	3
*live	1	4	and	3	3
*country	1	4	around	3	3
*college	1	4	against	3	3
*get	1	4	about	3	3
			a	3	3

※ENS は頻度 3 以上のみを表示

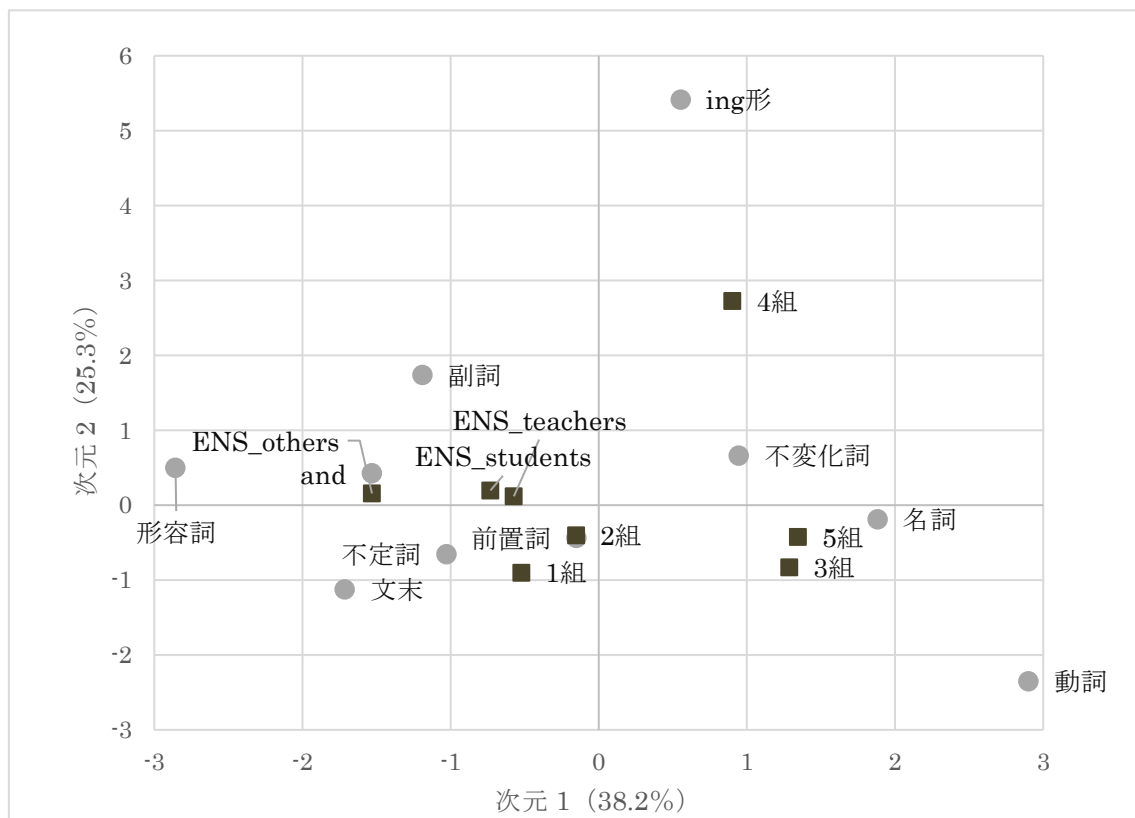
上表から、両グループにおける go コロケーション使用を具体的に見ていくと、JPN が go コロケーション学習上、抱える課題が 3 点挙げられる。(1) 前述の通り、JPN の go コロケーションは多様性に欠け、コロケーション知識が制約的である点、(2) JPN の高頻度順リスト上位 5 位のうち、2 つ (society, trip) は誤用であり、正しく go コロケーションを運用する力が身につけていない可能性が高い点、(3) 調整頻度が 10 以上の正用コロケーションのみに焦点を当てると、JPN は to, out, down, ENS は to out, on, outside, ahead となっており、ENS が多用するコロケーションのうち、JPN が使えていないものが多い点、が課題として考えられる。以上の課題を踏まえ、RQ3 では go 直後要素の品詞選択傾向について両グループ間で差が見られるか検証する。

4.3 特徴的直後品詞 (RQ3)

ENS グループは学生、教師、一般の 3 グループ、JPN はクラスごとに 5 グループに細分化し、両グループを特徴付ける直後品詞を検証するために、対応分析を実行した。解析の結果、7 つの次元が抽出され、第 2 次元までの累積寄与率は 63.52% となった。第 1 アイテムと第 2 アイテム間の合成を行い、出力された散布図が図 4 である。

図 4

go の直後品詞の対応分析



上図に注目すると、図中の右側は JPN グループ、左側は ENS グループという全体の傾向が認められる。ENS の 3 つのグループは全て第 2 象限に位置し、JPN の 5 グループは第 1, 第 3, 第 4 象限のいずれかに分散しているものの、ENS と同じ第 2 象限に位置しているものはないことがわかる。また、JPN と ENS の両グループで共通してみられる直後品詞としては、散布図の中心あたりに位置する前置詞と不変化詞が挙げられる。基本動詞 go の後に前置詞や不変化詞が続くという品詞選択傾向は ENS において高頻度で見られ、RQ2 の高頻度順直後要素リストの上位を占める直後要素の大半を go+前置詞または不変化詞の型が占めていることがわかる。ENS において高頻度で見られる直後品詞は、学習者が教材や試験などで目にする機会も比較的多く、JPN の書き言葉産出においても頻繁に見られたと考えられる。

だが、JPN 特徴品詞と ENS 特徴品詞を具体的に見ると、JPN が抱える課題も見えてくる。JPN 特徴品詞には ing 形があり、誤用としては名詞、動詞が挙げられている。JPN の英作文から、go+名詞型の使用例を見ると、*They go a university of a city that far from a hometown. (高 3, 2 組) のように基本動詞 go の直後に本来は必要となる前置詞を入れずに、場所を表す名詞を置く例が多く見られる。もう一例、go+動詞型の使用例を挙げると *For example you can go live or buy something you like. (高 3, 3 組) のように、連続して置かれることは原則としてあり得ない一般動詞の原形が続けて使用されている。次に、JPN にとって優先的学習ターゲットとなる ENS の特徴品詞を見ると、副詞、形容詞、and, to 不定詞が挙がる。特に形容詞は中心点からきわめて遠い位置にプロットされていることから、JPN にとって go+形容詞型は習得度がかかなり低いコロケーションであることがわかる。ENS から go+形容詞型の使用例を具体的に見ると、I was laid off when my company went bankrupt... (ENS, 一般) のように基本動詞 go が中心義ではなく、副意義で使われている例が多く見られる。同様に、go+副詞型についても I think that the government should go ahead ... (ENS, 一般) のように go は物理的な物や人の移動を表さない場合が多い。

以上のような結果となった背景には、中川 (2012) が指摘した動詞と不変化詞がそれぞれ持つ意味から句動詞全体の意味を予想できていないという学習者の問題が関係していると考えられる。ジーニアス英和辞典第 4 版で基本動詞 go を調べると、「①具体的に移動する」、「②作動する」、「③到達する」、「④事の進行・結果」、「⑤行ってしまった結果なくなる」の 5 つのカテゴリに分けて訳語が挙げられている。本研究の結果を見ると、JPN で特徴的に見られたコロケーションは全て基本動詞 go が「①具体的に移動する」の意味を持つものであった。訳語に依存せず、多様な用法を持つ go の意味的広がりを理解するためには大西・マクベイ (2011) が提唱するコアイメージが助けになる。基本動詞 go のイメージは「ある場所から立ち去って進んでいく動き」だと述べられているが、この基本イメージは学習者が go on, go off のように go 自体が物理的な人または物の移動の意味を伴わないコロケーショ

*live, *society, on, down, shopping は JPN 特徴語であり、動詞の直接結合（誤用）や決まり文句（go on a trip, go shopping）が大半を占めている。一方で、左側の第 2, 第 3 象限に見られる wrong, unless, really, job, around, here, backwards, the, are, of, with, bankrupt, against, there, ahead などは ENS 特徴語であり、圧倒的に多様な形容詞(wrong, bankrupt), 副詞 (here, there, ahead, really), 前置詞 (with, against) などがこのグループを特徴付けていると言える。

以上の通り、JPN の特徴語のうちの大半が決まり文句であることから、暗記に依存したコロケーション学習になっている危険性が示唆される。暗記によって限られた決まり文句は、文脈の中で正確に使用できているが、石井（2005）の指摘通り、その訳語に縛られて、コロケーション知識の広がりが増害されている可能性が高い。

5. まとめ

本稿では、日本人高校生と英語母語話者の意見主張型英作文コーパスを使用することで、基本動詞 go+X 型コロケーション産出について多様性、品詞レベル、語レベルの分析を行った。直後要素の多様性と語レベルの比較からは、基本動詞 go は JPN にとって馴染みのある語ではあるが、go+X コロケーションの知識は制限的であり、多様性に欠けることが明らかとなった。また、品詞レベルの比較からは「go+形容詞」、「go+副詞」は JPN にとって習得が比較的困難なコロケーションパターンである可能性が高く、JPN は「go+場所または方向を表す語」のように物理的な移動を意味するコロケーションの使用が大半であることから、投野他（2013）の研究結果を支持するかたちとなった。本研究では語レベルと品詞レベルの比較を併せて行ったことで、go がどのような直後要素、または品詞とつながった際に、go が移動以外の意味を表すのかについても示唆が得られた。

今後、実際に現場で英語教師が日本人高校生に対してコロケーション教育を行う際は、非常に頻度の高いコロケーションは高確率でインプットを得られるため、自然に学習が進む一方で「go+形容詞」、「go+副詞」型のコロケーションは明示的な指導が重要になることを念頭に置く必要がありそうだ。特に、「go+形容詞」、「go+副詞」型コロケーションについては go が移動以外の意味を表すことが多いため、日本人 EFL 学習者にとっては認知的負担も大きいと言える。また、訳語による暗記を促すのではなく、go や go と高頻度で結びつく不変化詞や前置詞のコアイメージを併せて指導することで、学習者のコロケーションに対する理解度が高まり、句動詞回避傾向も下がり、基本動詞 go だけでなく、そのコロケーションについても習熟度が高まることが期待できる。

今後、以上の知見をどのように教材研究に生かすかについてはさらなる研究が必要となる。本稿では、日本人 EFL 学習者と英語母語話者の比較を行ったが、学習者の英語習熟度の向上と共にコロケーション知識の発達にはどのような影響が出るのかについても今後精査する必要がある。また、本調査で日本人 EFL 学習者の特徴語とされたイディ

オム (go on a trip, go shopping など) の学習の功罪や、教室外ではほぼ英語を使用する機会のない日本人 EFL 学習者が自然なコロケーションのインプットを得られる機会をどのように提供すべきかについても検討する必要がある。より実践的な課題としては、コーパスデータ駆動型言語学習 (Data-driven Learning) は go のコロケーション習得にも効果があるかなどについても実証的研究を行う必要があるだろう。

最後に手法面の改善点について挙げると、go の左側コロケーションの扱いや共起語の多様性を検出する際の誤用の扱い、特徴語の抽出方法などが今後の課題として残る。本稿では、go の直後要素のみに焦点を当てて調査を行ったが、左側に置かれる主語は必ずしも I go to school. のように人が置かれるとは限らず、It goes as follows. のように人以外が主語になる場合もあり、後者のような例が日本人 EFL 学習者の go コロケーション習得を阻害する要因となっている可能性もある。また、今回は共起語の多様性の検出にあたって、日本人 EFL 学習者の英作文で見られた誤用は抜いて多様性の計算を行ったが、誤用の扱いについては今後さらに慎重に検討する余地がありそうだ。最後に挙げた特徴語の抽出方法については、対応分析ではなく、対数尤度比などを用いた頻度比較のようなより合理的な方法についても視野に入れつつ、今後はさらに高校生英作文データや着目する動詞の種類数を拡張しながら、日本人高校生向け重要コロケーションリスト作成に繋げたい。

引用文献

- Hill, J. (2000). Revising priorities: From grammatical failure to collocational success. In M. Lewis. (Ed.), *Teaching collocation: Further developments in the lexical approach* (pp. 47-69). Language Teaching Publications.
- Nagano, T. & Kitao, K. (2008). The necessity of negative feedback for learning L2 collocations. *Journal of Culture and Information Science*, 3(1), 1-13.
- Ryoo, M. (2013). A corpus-based study of the use of phrasal verbs in Korean EFL students' writing. *The Journal of Asia TEFL*, 10(2), 63-89.
- 石井康毅 (2005) 「英語不変化詞の意味の区分と語彙の意味として内在化されたメタファー」『言語情報学研究報告』7, 497-520.
- 石井康毅 (2018) 「話し言葉コーパスと検定教科書に基づく日本人英語学習者の句動詞使用実態の分析」*Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 3, pp.101-119.
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠 (2010) 『言語研究のための統計入門』くろしお出版.
- 石川慎一郎 (2012) 『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房.
- 大西泰斗・ポール・マクベイ (2011) 『一億人の英文法ーすべての日本人に贈る「話すため」の英文法』東進ブックス.
- 啓林館 (2018) 「高等学校 新教育課程と学習指導要領ー英語」: https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/kou/english/pdf/english_sidou.pdf 最終閲覧 2021 年 2 月 10 日.

- 佐藤剛 (2013) 「中学校英語教科書の語彙分析」『弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要』 11, 33-42.
- 高野恵美子 (2011) 「日英移動動詞 COME と GO の対照研究：認知言語学の視点から」『学苑』(昭和女子大学) 846, 28-39.
- 谷明信・堀池保昭・杉森直樹・富田かおる (2002) 「コーパスによる英語句動詞研究—応用言語学的観点から」『兵庫教育大学実技教育研究』 16, 31-37.
- 投野由紀夫・金子朝子・杉浦正利・和泉絵美 (2013) 『英語学習者コーパス活用ハンドブック』大修館書店.
- 中川右也 (2012) 「句動詞指導への示唆：認知言語学と英語教育の接点を求めて」『米子工業高等専門学校研究報告』 47.
- 長谷川修治・中條 清美 (2003) 「高校生と大学生の英作文に使用される連語の学習段階別調査」『日本英語表現研究』 20, 20-28.
- 堀正広 (2009) 『コロケーション研究入門』研究社.
- 室勝 (1985) 『ベーシック・イングリッシュ入門—850 語で英語は書ける』洋販新書.

辞書類

- 小西友七・南出康世 (2006) 『ジーニアス英和辞典第 4 版』大修館書店.
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義語ネットワーク事典』小学館.

コーパス

- The Corpus of Contemporary American English (COCA): <https://www.english-corpora.org/coca/>.最終閲覧 2020 年 8 月 16 日.
- The International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE): http://language.sakura.ne.jp/icnale/icnale_online.html. 最終閲覧 2020 年 8 月 16 日
- The Japanese EFL Learner Corpus (JEFLC): <https://scnweb.japanknowledge.com/~jeffc03/cgi-bin/login1jf.cgi>.最終閲覧 2020 年 8 月 16 日.

ソフトウェア

- Anthony, L. (2015). TagAnt (Version 1.1.0) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <https://www.laurenceanthony.net/software>
- Anthony, L. (2019). AntConc (Version 3.5.8) [Computer Software]. Tokyo, Japan: Waseda University. Available from <https://www.laurenceanthony.net/software>

